

1 地球環境問題への取組み

1. 2015年度の温室効果ガス排出実績

CO₂排出実績

東日本大震災の発生以降、^{げんかい} 玄海及び^{せんだい} 川内原子力発電所の停止により、代替する火力発電の電力量が大幅に増加したことから、震災前(2010年度)と比較すると、CO₂排出量は大幅に増加しています。

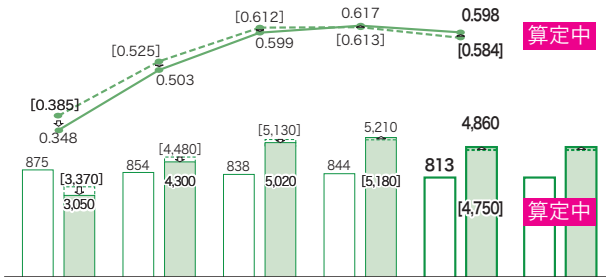
2015年度のCO₂排出量は現在算定中^{※1}であるものの、川内原子力発電所の1、2号機が2015年9月と11月にそれぞれ通常運転に復帰したことにより、2014年度実績と比較すると減少する見通しです。

なお、定期検査を除き、年間を通じて川内原子力発電所1、2号機が運転を行う予定の2016年度については、CO₂排出量の更なる抑制が期待できます。

※1：算定が終わり次第、九州電力ホームページ等でお知らせします(7月末予定)。

九州電力のCO₂排出状況

● 販売電力量あたりのCO₂排出量(調整後^{※2}、kg-CO₂/kWh)
 □ 販売電力量(億kWh) ■ CO₂排出量(調整後^{※2}、万トン-CO₂)
 [] 内は実排出量及び排出係数の値



※2：CO₂排出クレジット、再生可能エネルギーの固定価格買取制度(FIT)に伴う調整等。
 (注1) 国が定めた「事業者排出係数の算定方法」により算出。
 (注2) FITの調整によるCO₂排出量の増加分が、CO₂排出クレジット取得による削減分を上回ったため、2013年度と2014年度は調整後排出係数が実排出係数を上回りました。

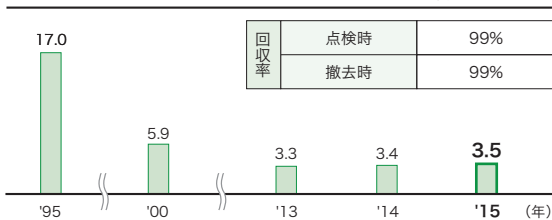
WEB 詳細は九州電力ホームページ
 関連・詳細情報(P2参照) > 固定価格買取制度(FIT)の調整により九州電力のCO₂排出量が増加する理由

CO₂以外の温室効果ガス排出実績

■ 六フッ化硫黄(SF₆)

優れた絶縁性を持つことから、電力機器の一部に使用しています。機器の点検・撤去にあたっては、大気中への排出を極力抑制しています。

SF₆排出量



※：SF₆ガス重量をSF₆の温暖化係数(22,800(2014年度までは23,400))を用いて、CO₂の重量に換算。

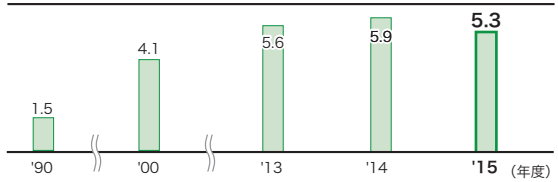
- >> 固定価格買取制度(FIT)
- >> SF₆(六フッ化硫黄)
- >> N₂O(一酸化二窒素)
- >> 熱効率
- >> 利用率
- >> 温暖化係数
- >> HFC(ハイドロフルオロカーボン)
- >> オゾン層
- >> フロン
- >> 規制対象フロン
- >> フロン排出抑制法
- >> CH₄(メタン)
- >> PFC(パーフルオロカーボン)
- >> 低炭素社会
- >> エネルギーセキュリティ
- >> 再生可能エネルギー
- >> 持続可能な社会
- >> 地球温暖化
- >> 指定電気事業者
- >> 温室効果ガス
- >> CO₂排出クレジット
- >> ライフサイクル

用語集をご覧ください

■ 一酸化二窒素(N₂O)

主に火力発電所での燃料の燃焼に伴い発生するため、発電所の利用率により発生量が変動しますが、火力総合熱効率の向上等に取り組むことにより、排出抑制に努めています。

N₂O排出量



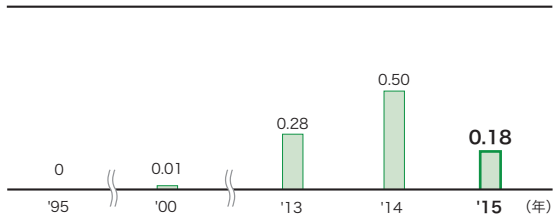
※：N₂Oガス重量をN₂Oの温暖化係数(298(2014年度までは310))を用いて、CO₂の重量に換算。

■ ハイドロフルオロカーボン(HFC)

空調機器の冷媒等として使用していますが、機器の設置・修理時の漏洩防止、回収・再利用を徹底しています。フロン類(規制対象フロン含む)を使用している業務用冷媒機器等については、2015年4月に施行されたフロン排出抑制法に基づき、対象機器の点検を徹底し、機器新設時や取替時には、規制対象フロン不使用機器の導入を進めています。

WEB 詳細は九州電力ホームページ
 関連・詳細情報(P2参照) > オゾン層の保護

HFC排出量



※：HFCガス重量をHFCの温暖化係数(12~14,800(2014年度までは140~11,700))を用いて、CO₂の重量に換算。

■ その他の温室効果ガス

火力発電所での燃料の未燃焼分としてメタン(CH₄)が排出されますが、排ガス中の濃度が大気中の濃度以下であることから、実質的な排出はありません。また、一部の変圧器では、冷媒及び絶縁体としてパーフルオロカーボン(PFC)が使用されている例がありますが、当社での使用はありません。